

山形短期大学民話研究センター資料叢書

鬼と豆のくいくら

小国町昔話集 三

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

鬼と豆のくいら

小国町昔話集 三

編 武田 正

鬼と豆のくいくら

小国町昔話集 (三)

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
大まぐらいの話	古屋の漏	土蜘蛛退治	大入道の話	ブサローの化けもの	猫股 — 火車 —	ボデフリ — 牛方と山姥 —	鼻水地藏	地藏浄土	金売り吉次	猫とネズミ	おさん・お梅・お吉狐	狐むかし
48	47	44	38	36	34	30	25	15	11	10	8	5
23		22	21			20	19	18	17	16	15	14
枳餅	おかしくて、むごい話	おつかなくて、	和尚と小僧	(2) 数の子	(1) クキナ漬	南の兄んや — 南の山の馬鹿聲 —	鴨とり (2)	鴨とり (1)	篩借り	寝言兄弟	かくれみの	鬼と豆の食いくら
77	76		72	70	69	—	65	62	60	59	55	52

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24
意地っばりの話	半殺し	もうけた話	慶次之介と玉川太郎	義経と弁慶	西行法師	曾呂利新左エ門	渡辺綱	沢中の喜太郎	むかしむかし

95	94	92	90	89	86	84	82	80	78
						あとかきの覚え書	臼ひき唄	盆唄	わらべ唄

凡 例

- 一、テープに吹き込んだものを、その語り口のまま表記したものである。
- 二、「慶次之介と玉川太郎」は川崎みさを嫗から原稿として頂いた。
- 三、「もうけた話」「半殺し」「意地っ張りの話」は『小国町昔ばなし』より再録させていただいたものである。

- 四、昔話の配列は大体『日本昔話集成』に準じたが一部変更がある。
- 五、昔話の聴取の折に聞いた「わらべうた」「民謡」も同時にのせた。

（文部省科学研究費補助金（奨励研究 B）の調査の報告の一部である。）

1 狐むかし

むかしあつたけど。

賽の神に、おさん狐住んで、晩方通る、嫌やんだ嫌んだ言うてだどこあつたけど。そしたらそこ、ある偉ぶらしたいような若衆いて、そしてそこさええ空に連せて行つたば、狐ええあんばいに昼休みしつたずも。橋のたもとさ。

「これは、狐の畜生、おさん狐眠つてだ。みんなば化かすていうから、おれ、いたずらしてみんべ」

と思つて、長い棒持つて行つて、尻尾つついだずも。ほうしたら、おさん狐魂消て跳ね上がつてはあ、その上のアブラコ山さはあ…。

「いつかしや、返報かえしすつから憶えていろ」

て、跳んで行つたど。ほうしてはあ、

「あの畜生ば、おれ、追払つた」

なて喜んで、そして下叶水の若衆であつたそうだ。

「大石沢さ行つて用達したて早く来られつから、早く行つて来んべ、晩方なつどまたあの狐、出はつど悪いから…」

て、いそいで用達して来たど。そしてこんど、賽の神さ来たば、与惣治という人の家あつたなだな。おどつつあとおつかさといった家…。

「なんだか、あそこの家さ、いまちいとなつたば、まだ暗くなる時間でもないども、暗くなつて来たし、そこの家から提灯借りて行んかなあ」

と思つて寄つたど。そしたば、

「提灯も貸すども、おらえの婆さ、腹痛め、腹痛めるて苦しんでいたから、おれ、親類の家さ行つて、誰か頼んで来つから、一時留守居いつときしていてもらいたい」

と頼まつたずも。「嫌やんだ」とも言わんねから、一時留守居したど。そしたら病人は、「叶水のあんつあ」て、寢床から細い手出したずも。

「いまとこつちやきて、おれば揉んで呉くろ」
なて。

「いやいや、これはなんだか、おれ一人になつて、あの人、留守居の人帰つてこ

ないうちに死んだら、大変だ」

と思つて。また、

「叶水のあんつあ、ここ切ないから、揉んで呉ろ」

なて、細い手、また出して寄越すずも。「恐つかない！」て引込んだど。そしたば、その拍子にザブンと川さ落ちてしまつたずもの。橋から…。

家だと思つていたなは、橋のたもとであつたど。そしたば、川さ落ちたば、
「さっきだの敵、いまとつた、おれはおさん狐だ」
かたき

と、薙さ逃げて行つたけど。んだから、狐で油断してかまわんねもんだけど。
むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

2 おさん・お梅・お吉狐

むかしあつたけど。

下叶水と胡桃平の間に、三匹の狐がいて、賽の神のはおさん、廻戸まわとのはお梅、下大石沢の胡桃平の間のブナ畑のはお吉狐であつたど。

胡桃平の次郎右エ門の親父と息子が、盆にもなるから、小国さ買物に行つて、隣のも頼まつで油揚げやローソクなど沢山買つて、一人では夕方になつど狐どもにいたずらされつど困るというので、賽の神の橋のとこまで来たら、

「二人でなんぼか、おどつつああと兄あんつあが疲れたべから、娘迎えに来たから、ちいと分けて背負うから……」

て、背負つたど。分けて背負つてもらつて行つて、こんどまた廻戸さ行つたらまた迎え来たずもの。その下の妹だ二人で来たど。

「おつかも、姉も出はつて、おらだばりで待ちでる。長くなつたから、おれも迎えにきたから、半分、おれ背負うから、おどつつああと兄あんつあはちいと背負つて歩あ

えべ、疲れたべから…」

て、また妹たち二人が廻戸でまた分けて背負つて呉つたど。それからこんど行つたば、隣の娘つこと、おつかさ、

「おらえの分も頼んでやったな、重かつたべに、あまり遅くなつたな、おらも迎えに來たから、みんな背負うから、樂にして帰るように…」

て、すっかり背負つて呉つたど。ぶな畑、大石沢の胡桃平の間の峠で、そして皆背負つてもらつて家さ歸つて來たずも。そして胡桃平の家さ歸つて來たずも。そして、胡桃平の家さ歸つて來たらば、

「今きたか、まず湯沸かしたから湯さ入れ」

なて、湯さ入つて、裸になつて、湯さ入つて、ええ氣持で湯さ入つていたらば、こんど誰か草刈りだか何だかに來てはあ、夜明けてお日さま出たなであつたど。草刈りできた若衆、

「なんだ、昨日、盆きんな買ないものに行つて來たつて言うけあ、そんなどこにいて…」
なて、

「おれあ、湯沸かしてもらつて、ええあんばいで上がらんねがら、いつまでも入つていっかと思つて、ゆっくり入つてだ」

て言わつて、

「なんだ、そこ、川だぞ、ほらブナ畑の川だ」

て言わつて、それで気付いてみたらば、その先にはおさん狐、賽の神で、それからお梅狐、廻戸で、こんど一番後にブナ畑のお吉狐に、みんな荷物盗ら^とつて、ブナ畑の川さ入つていたなだけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

3 猫とネズミ

むかしあつたけど。

お釈迦さまが大病になつて、今にも死にそうになつたど。そこで天竺さ薬とり

に行かんねことになった。それで、「ネズミがええがんべ」て、そう言わつてネズミが使いに立った。そして一生けんめいで行つてきて、その袋くわえて帰つて来た。ごんだ。そしていまちいとお釈迦さまの傍さ帰られつどき、猫、どこからか跳んできて、そのネズミ食つてしまつた。それで、お釈迦さまのあれに間に合わなくて、お釈迦さま逝くなられたで、猫は十二支さ、そのためにはまられなかつた。

(川崎みさを)

4 金売り吉次

吉次という炭焚きあつたわけですな。そこらの部落に、それがなかなかの貧乏で、容易に糊口をぬらすことも容易でなかつた。で、人はお祭りだとかお盆だとかといつて休むげんども、吉次は休まんねというんだな。貧乏で炭焚いてそれを

町へ持つてきては米買つたり、味噌買つたり……こういうわけだ。それで、

「何とかして、おれも人並みにして、盆とか正月とか休みたいもんだ」

と。そうすつど、それがなかなか思うようにかなわないと、こういうわけだ。

「おれには貧乏というものは喰付きもんだ。何とかしておれも盆とかお祭りには休みたいもんだ」

と念願しても、なかなか休まんね。そして吉次はまずまず出来上りの炭焚いて町にもつてきてやつたんだ。とにかく吉次がそうやっているもんだから、あるとき、見たこともないような年寄りが現われて、

「吉次、お前はよく人の休むときも休まねで稼いだもんだ。こんどおれは、お前は稼がなくともええようにしてやる」

と、こう言うんだそう。ところが吉次は、

「そんな有難いことだったら、どうか教えてくれ」

「そうか」

と。そうしてある時、相変らず炭焚いてあげましようと思つたら、炭さつぱり

なかつたど。

「さあ、これは大変なことした。あんな見も知らないじさまの話など、うつつ抜かして聞いたから、罰当つた。大変なことした。あんなこと聞かねばええがつた。聞いてしまつてはあ、こんどこれからは馬鹿話聞くまい」

と思つて、その釜あけだつて。炭、さつぱりない、困つたことした。いやいや困つた、困つた。こんどあんな者のいうこと聞くまいと思つた。ところが、こう底の方見たところが、何か光っているど。吉次は、

「炭、さつぱりないのに、何か光っているもの見える。これ、おかしなもんだ」
と思つて、まず、金の棒かねで引っかけて出したど。そしたら光つた金の玉だ。

「いや、これは大したもんだ」
と思ふような、

「しかし、こんなもの誰か買ってくれる人あらば、よからうども、もし買つてくれないことにせえば、こんなもの持つてだつて仕樣ない。まず、これは町に持つて行つて、町の旦那さまどこさ行つて聞いてみる」

と言つて町へ持つてきた。そしてその旦那さまさ、

「旦那さま、旦那さま、こんなもの、おれ、炭焚いたどころ、炭さつぱり無いでこんなもの一つ光つてだ。旦那さま、これ買つてもらわんねが」

こううた。

「どれ、持つてきてみれ」

そして見たところが、金の玉。

「いや、これは吉次、大したもんだ。買うも買わねもあつたもんでない。お前は明日から炭焼き止めたらええ」

「いや、旦那さま、おれあ、炭焼きやめられれば、食^かれません」

「いや、食^かれるも食^かんないも、いや、その玉一つあれば、お前、家も建てれば、一生唯いて食^かれるようになる」

と言つて、それを買つてもらつて、それから吉次はだんだん近隣にもないような長者になつたど。

(田村三郎)

5 地蔵浄土

むかしあるところに、じいさんとばんちやといであつたど。隣りにもじさ、ばさで暮しつた。そして隣のじさ、ばさは非常に慾たかりなもんだから、これは割合いに樂に暮していっども、片方のじんつあとばんちやは、お人好しなもんだから、乞食来れば呉ほいとつでやる、旅の者が来れば泊めてやる、するもんだから、節になつても正月米もないような状態だつた。

「ばば、ばば、困つたもんだ。正月米もないぐなつたが、隣の家さでも行つて借りて来ねば、なんねべな」

「ほだなあ、隣のじんつあ、ばんちやなの、貸して呉れるんだか、なんだか」

「貸して呉れるんだか、なて言うても、正月だもの、何とかして固まつたものでも神さまさ上げねでは、悪いぜ」

て言うので、隣の家さ借りに行ったところが、

「やあ、お前の家では旅の者来れば泊める。乞食来れば呉ほいとつでやる。常日頃ふる

まつてで、そしてこの節になつてから、正月米ないから貸して呉れなんて、とんでもないことだ。おらえの家さはそんなさ貸すのではない」

「いやいや、そんなこと言わねで、まず、おらえの実状は正月に上げるものもなくて、困っているのだから、呉つだおかけで、こうなつたと思えば、呉つだこともうらめしいような氣もすつども、それもそんな時、仕方ないなだていう、何とか貸して呉れ」

と頼んだ。ところが、

「ほんだら、これでも持つて行つて、拵えで上げたらええがんべ」
て言うて、シナを貸してくれたど。それから、ばばは歸つてきて、

「じんつあ、じんつあ、シナ借りてきた」

「ああ、それはええがった、ええがった。んだら、シナ、挽臼で搗いて団子作つて上げんべ」

て言うんで、ゴロゴロ、ゴロゴロと挽いて、粉を作った。そしてその粉を水で練つて団子を作つてゴロゴロ、ゴロゴロと作つて見たところが、あんまりちいと

だったので、一つしか出来なかった。そしてガラガラ、ガラガラと煮立っていた湯の中に、団子をポロッと入れんべと思つたら、囲炉裡の隅さあいっだネズミ穴さ、コロコロンと入つて行つた。コロコロ、コロコロと入つて行くもんだから、やれ、いたましやと思つて、じんつあはそつから追掛けて行つたど。そうすつど、コロコロ、コロコロと団子入つて行く。じんつあはその後から、

「団子どの、団子どの」「はいはい」「どこまでござる」

「新座の宮の薨葺きの地藏堂に参る、参る」

「団子どの、団子どの」「はいはい」「どこまでござる」

「新座の宮の薨葺きの地藏堂まで参る、参る」

こう言うて転んで行く。どこまでもどこまでも行つたところが、薨葺きの地藏さまあつて、地藏さま口動かしていつから、

「地藏さま、地藏さま、いま団子来ながつたべか」

「団子、来た。どういふのだ」

「実は、あの団子は隣の家から米借りてきて、やっと作つて、神さまと仏さまさ

上げんべと思つて、茹つどきに間違つて落してしまつた団子だ」

「いやいや、それは可哀そうなことした。おれがそれを、みな御馳走になつてしまつた。仕方ない、おれあ御馳走になつてしまつたから、お前、日も暮れそうになつたし、こさ泊れ」

「ほんでは泊めていただくか」

ところが、その地蔵は、

「この家の前さは、今日、鬼どもが来て、博奕打つ」

「いや、それは恐つかないことだな」

「いやいや、恐つかないで言つてねで、泊れ。おれのこの頭の上のツシさ上がつて、泊つてろ。んで、ちやうどええ頃になつたら、鶏の真似三べんせえ。そうすつど三番鶏鳴くと鬼どもは帰つて行く。んだから、それから明るくなつたら、お前帰ればええごで」

「んだげんど、地蔵さま、どうやってこのツシさ上がるんだべ」

「いやいや、おれの肩さ上がつてええから、ここから上がつて行げ」

「地藏さまば踏み台なんて、もったいなくて、おれあさんね」

「ほんなこと言つてつど、今に鬼が来て見付けられつぞ」

こんど、

「ほんではまず、ごめんして呉ろ」

と言うわけで、ツシさ上がった。んで、ツシさ上がっていたところが、虎の皮の褌をした赤鬼、青鬼、ゾロゾロ、ゾロゾロと十人ばかり集まってきた、博奕打ちはじめた。「二両だ。五両だ。丁半、丁半」て言うて、その博奕打つてゐる。誰か勝つた、彼が勝つたて言うてる。火焚いて面白そうにしてやつてゐる。じいさんもそれを見てつどいいうど、なるほど博奕というのは、ああいう風にするもんだか、はじめておれあ見せてもらつたと思つていたところが、下の方で地藏さまゴソゴソ、ゴソゴソというような気する。

「それは、ほだほだ、今があれだか…、コケコツコー」

て、鶏の真似をしたところが、

「おお、一番鶏鳴いたなあ、ああそうが、こんど倍掛けだぞ。よけい掛けんべ」

て言うので、またやった。

「はあ、こんがえにいっぱい取った方にも出したし、なくなった方にも出たようだな」

て見っただとところが、また地藏さま動くような気がする。

「ああ、ほだほだ、コケコッコー」

「ああ、二番鶏鳴いた。こんど三番鶏鳴くど、おしまいだぞ」

また賭けてやってだ。ほどええと思つて、「コケコッコー」で鳴いたところが、「はあ、三番鶏鳴いてしまつては困る。早く帰んべ。また明日の晩も来んなだから…」

て言うわけで、そこさ置きつ放しにして、鬼たちは帰つて行つてしまふ。そうやってるうちに夜が明けた。そうすつど地藏さま、

「じさ、じさ、降りてこい。鬼共あここさお土産置いで行つて呉つたから、もらつて行げ」

そう言うて呉れるもんだから、

「地藏さまに、おれ呉つでやつから、もって行けて言うもんだから……」

その大判小判をもって、じんつあは帰ってきた。そしてこんど、隣の家さ行つて、

「じんつあ、じんつあ、おれもひよつとしたことで、金も手に入つたから、どうか米売っておくやい」

て、こんど金を出したもんだから、心よく米を売って呉つた。情深いじいさんは、家さ帰つてきて、それで餅を搗いて、神さまや仏さまさ上げたわけだ。そうしたところが、隣のじさま、

「じさま、じさま、前の晩げ、何もなければなんて言つて、おらえさ米借りに来た。次の日は金持たがつてきた。どうも不思議でないか」

正直なじさまなもんだから、そのことを話して聞かせたわけだ。

「そうか、そんじや、おれもやってみんべ」

隣の惣たかりのじさまは、家さ行くやにわに、

「ばさ、ばさ、シナ持つてこい」

「なえだ、じんつあ、シナなて、正月早々持つてこいなんて…」

「ええから、何でもええから、持つてこい。挽臼だ。挽臼、挽臼…」

なんて、そのシナを挽臼でひいて、団子を作つて、囲炉裡さ鍋かけて、ろくに煮立ちもしないのさ、団子ゴロゴロと丸めて、囲炉裡の隅のネズミ穴さ入つてやつた。ゴロゴロ、ゴロゴロと入つてやつた。すぐゴロゴロと行つては止まる。

「この団子、うまくない団子だな。ゴロゴロと行かねばなんね、お前は…」

足で蹴つぽったり、棒で押したりして、追かけて行つた。ゴロゴロ、ゴロゴロと行つたところが、その地藏さまいた。

「地藏さま、地藏さま、おれの団子食つたべか」

「いや、食わね、そこにある」

「いや、お前に食つてもらわねど困るなだ」

「困るて、お前、何だ」

「いや、まず困るなだ、食つてもらわねば…」

そして、嫌んだ嫌んだというななを、地藏さまの口さ団子を押込んで、

「なんだ、じさま、人んどこさ押込んでしまつて…」

「まずええから、今晚はツシき泊めてもらうから」

「おらえのツシなど、ひどいぞ。お前、こんなどこさ泊つて、何すんなだ」

「いや、まず、ええから泊めてもらうぞ」

そして泊つていたところが、鬼共が来て、昨夜と同じように博奕ゆんべな始めた。そうしたところが、どう見てもその金のいっぱいあるの見つじど、欲しくて欲しくてたまらない。

「ああ、しょない。コケコツコー」

「なんだ、一番鶏鳴つたか、今晚は不思議だ」

そのうちに、ちいとやると、気もめてしようないもんだから、「コケコツコー」

「二番鶏、まだそんな時刻ではないようだ」

そして、じじは不思議がらつだもんだから、まず、よほど我慢したども、どうも金見つど我慢なんね。「コケコツコー」

「なんだ、おかしいぞ、おかしいぞ、早っから鳴くわけはないんだ。おかしい、

これはおかしいごんだ」

て言うんで、

「地藏さま、地藏さま、おかしいなあ。今晚のお前んどこは…」

「いや、何もおかしいこと、ないべ」

て言うど、

「フンフン、人の匂いすんぜ、ああ、隠したでないか」

て言うて、ツシき隠つてだ慾たかりのじさは、鬼に張り出さつて、食つてしまつたど。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

6 鼻水地蔵

むかしあつたけずも。じんつあとばんつあ暮しつたど。じんつあは非常に稼ぎもんで、一生懸命田でも畑でも稼ぐ。ばばはばばで家の中のこととはするども、なかなか他の荒仕事はしないばばであつたずも。

で、ある年のことだけれども、火野刈りにじんつあ行つた。山さ行つたずも。火野刈りて言えば、ほれ、盆前の暑いときのもんだから、一生懸命に火野刈りしてるうちに、喉乾いてきた。喉乾いてきたから、沢さ行つて水飲んだ。そしたら非常にうまい水だ。

「ええ水見つかつた」

と言うんで、じんつあは大喜びで、まず火野刈り終した。なんぼ飲んでみても、この水はうまい、どうも不思議に思つて、じんつあはずうつとその沢登つて行つてみた。登つて行つてみたところが、岩の下のところ^たに地蔵さま一つポツンとあつて、そのところから、タチンタチンと水が垂っている。その水がその清水の出つ

どころさ、ポタンポタンと落ちてゐる。そのところを流れてきたのを、じんつあが飲んでる。それから、

「地藏さまの鼻水なて、どんな味するもんだ」

と思つて、手さちよつともらつて舐めてみたところが、これがとてもうまいもんだ。なんとも言えない甘いし、うまいものだ。

「ああ、こんなところに置いてはもったいないから、おらえさ行つてお祀りするべ」

というので、じんつあは家さ地藏さまどころをお迎えして歸つた。そして上段の床の間さ飾つて、鼻水、ポタンポタンと落ちるもんだから、他さ落ちてはうまくないというので、鉢を下さ置いて、毎日、朝拝み、鉢さ溜まつた水を頂き、御飯を上げたりして、お祀りした。ところがばさまは、

「じんつあは、どうも座敷さ行くど、なかなか出てこない。じんつあ、じんつあ何しつた」

「いやいや、にしゃはええなだから、来つことない。こさは今度は入つてはなら

ない」

と、じんつあにはおんつあれつから、ばさま、まず行かれない。どうも朝晩はその上段さ入ってしばらく出てこない。

「若い女でも連^つつできて置い^{おな}つだなだかも知んない。これは、じんつあいない時一つ調べて見ねばならない」

て言うわけで、ばさまはそつと、じんつあにおんつあれつと悪^{わる}れなと思つたげんど、入つてみたど。ところが、地蔵さまポツンと一つあつて、前に鉢置いてあつて、ポチヨンポチヨンと鼻水たつで、溜つてゐる。

「なんだべ、こんなもの、地蔵の鼻水なて、こんな汚ないもんだ。これ好きで、じんつあ入っているなだとすれば、何かどうかなつていんなだべな」

と思つて、舐めてみたて言うなだど。ほうすつど、これ、すばらしくうまいものだ。

「なんだえ、まず。じんつあ、こんなうまいもの、おれさ今まで教えもしないで、自分ばり飲んで…」

ほんで、ばさまはチンと舐めては、なくなつど困るなと思うども、こたえらんねくて、

「なくなつど、これ、じんつあに分るな」

と思つても、我慢できなくて、飲みして、しまいに皆飲んでしまった。

「さあ、困った。じんつあは帰る頃になった。鼻水は溜つていない。どんどんと流して呉れればええ」

と思うども、出しても呉んねえ。あいかわらずポタンポタンとしか出ないと、鼻の穴を見つど、ちっちゃこい穴で、垂れにくそうな穴だ。それからばんちやは鼻が大きくあけて呉れれば、ジョーと出つべあ、すつどまず、じんつあに分んねでしもうべ」

て言うんで、火所ほどさ焼火箸焼いて、もって行つて、鼻の穴めがけてジューと入つだ。ほうすつど、地藏さま、ビューンと屋根を抜いて飛んで行つてしまった。ばさまは困った。困つたども仕様ないから、じんつあ来るやにわに、飛んで行つて、

「実は、おれ、その、じんつあ、何隠しつたと思つて見たば、地藏さまの鼻水垂つ

ていたもんだから、それ舐めらせてもらったところが、あんまりうまくてみんな舐めて、いっぱい出すべと思つて、その鼻の穴さ焼火箸入ったところが、地蔵さまは煙出しから逃げて行つてしまった。われがつたから勘弁して呉ろ」

「ばば、ばば、そんなことは、まずお前もそんな無理なこととしては悪がつたし、おれも隠したんだから、それは悪がつた。それは両方悪がつた。まず可哀そうなことしたのは、地蔵さまだ。地蔵さまさ行つてあやまって来ねばなんね」

て言うんで、じさまがその地蔵さまのいてあつた岩の下まで行つてみたところ鼻、火傷して、大きな団子みたいになつて、真赤になつて、はれて、地蔵さまは苦しがつていた。それから、じさまは、地蔵さまのどころさ、

「まことに申訳ない」

て言うんで、あやまって火傷の薬つけてくつた。そうして火傷なおして呉つたところが、こんどはええくなつたものやら、病氣なおつたものやら、地蔵さまは鼻水たらさねぐなつたけど。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

7 ボデフリ ― 牛方と山姥 ―

越後からボデかつぎして、峠にかかった。そしてこんど来たところが、「待て待てえ」て追掛けて来た。待つてだところが、

「魚一匹呉れ」

「おれあ、商人あきんどだから、これは五文だ」

「いや、おれは金持たねから、それ呉つて呉れ」

呉つてくれて、仕様がなから、一本やった。ところが見てるうちにミリミリミリと食つちやう。

「これは唯ものでないぞ」

て、ボデフリは逃げ出した。して、「待てえ、待てえ」て近付きそうになつど、ボンと投げた。また追付かれそうになつどボンと投げた。そして全部投げてしまった。しまいにボデまで投げてしまった。そして飛んで行ったところが、小屋こがあつたから入った。どうも他の家とは違ふ。鬼婆の家だかも知んねて言うんで、

上にいたわけだ。したところが、

「ああ、寒い、寒い、寒い」

て言うところで、カン鍋に酒をおかんした。鬼婆は火に当って温かくなつて来たんだし、魚も腹いっぱい入^いつでいたもんだから、コクリコクリと始めたので、オノガラを継いで、上でチュウチュウ、チュウチュウと飲んで、全部飲んじやつた。飲んじやつたところが、チャチャチャチャと言うたんで、鬼婆、はっと目さめて、

「チワチワ、チワチワと、火の神さまも上がりやつたか」

こう言う。

「おやおや、それでは困ったな。んではこんどは、餅でも焙^いつて寝ましようか」と、こう言うんで、餅焙^いつてプウツとふくれてくる。上に居^いつて、棒でそれをチクツと刺して釣上げて、魚屋が食^くつてしまった。そして最後の奴がプウツとなつて釣り上げられる音で目覚めて、

オヤオヤオヤ

プウプウさまが上がりやったが、
これはこれも仕方がない

と、こう言うて、

今晩は、木の唐戸にしましうか

金の唐戸にしましうか

キイキイ、キイキイ鳴く虫の

音がするんで、木の唐戸

入って寝ましようと思ましたわ

そんで、木の唐戸に入って寝たので、こんどボデフリは上から降りてきて、錠を外からピチンと閉めた。こんど、中で鬼婆は寝てる。それでこんどはキリを持つてきて、魚屋はキリキリキリと穴を開ける。

なんと今夜は寒いこと

キイキイキイと虫が鳴く

この鳴く虫の声絶えて

ぬくい春の日来ればよい

と言うて寝た。こんどの魚屋が湯沸かして穴からチューと入つてやった。

ぬくいぬくいの春来ずに

暑い暑い夏が来た

と言つてゐるうちに、ドンドン、ドンドン湯がふえて来て、熱い熱いと言いながら、その鬼婆はそこで死んでしまった。で、魚屋はそこで火焚いて温まつて、その日無事に隣の村さ行つたけど。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

8 猫 股 ― 火車 ―

ある山寺に、虎猫を大事にして飼ってる和尚さんがおった。しかし、このお寺さんというのは、弟子にちよつとしか付かなかつた為に、お経をよく知らなかつた人だ。それで、誰もお詣りにも行かなければ、頼んでもくれない。それで困つてしまつて、食うや食わずの生活をしておつた。その猫が言うには、

「長い間お世話に、お寺さんにはなりました。いづれそのうちに、檀家のどこがこの人が死ぬので、その時にわたしはあらゆる力をふるつて、最後のお礼のお返しをしたので、ナムカラタンノー、トラヤーヤー、トラヤーヤー、トラヤーヤーとなえて呉れ、後は何というて呉れても結構だから、やつて呉れよ」

て言うて、その晩から居なくなるわけだ。その晩から居なくなっているうちに、その向いのおじいさんが年取つて死んでしまつて、いざ茶^だ毘出しになつた。茶毘出しになつたところが、行つてみたら、真つ直ぐになつたまんまで、棺に入れることができない。

「はあ、そういうのか」

と言うので、お寺さんが体を撫でながら、「ナムカラタンノー、トラヤーヤー、トラヤーヤー」と体を撫でさすってやったところが、こう体が自由になるようになって、無事棺におさめることができた。それから、いよいよお葬式になったところが、棺の蓋が葬場に行ったら、空中にこう上がってしまった。ファーと上がってしまった。んでそのお寺さんが、

「ナムカラタンノー、トラヤーヤー、トラヤーヤー」

と言ってるうちに、だんだん、だんだんと下って来て、元の通りに棺におさまった。それからお寺さんは、「ナムカラタンノー、トラヤーヤー」とだけは言っておれないんで、

「向うの屋根の下には干場が一れん、二れん、三れん、四れん、五れん、六れん、七れん、八れん……」

と言うて、お経を長くとなえて、無事に葬式を終した。それからと言うものは、非常に法力のきく、お寺さんであるということになって、周りからよく頼まれる

ようになって、幸せに過ごしたど。

(塚原名右エ門)

9 ブサローの化けもの

むかしあつたけど。

あるさびしい村に、町さ出て行くとき、どうしても通らねね道のどき、お化け出てきて、毎晩かた、「ブサロー、ブサロー」というずもの。そうしてそこ通った人はみんなはあ、その化けものに食われつか何かして帰って来らんねから、誰も行く人なくなつたけど。そして孝行息子の、いっぱい稼ぐ息子いて、

「んだら、そんがえにみんな困るようだったら、おれ行つて退治してみんなの為になつかなあ」

て、ここの家の父ちゃんとっのような人であつたべ、そしてこのばつちや、

「みんなのためだもの、おれ、出かけらせんのも心配だども、行つて来い」
なんて出掛けただ。ほうして途中まで行つたば、こんどブサロー、ブサローよ
りも、まず、

イチロクサントウの峯通つて来い

イチロクサントウの峯通つて来い

て言うずも。―イチロクサントウつて、どんな峯であつたか、まず―普通は行
かねその峯通つて行つたど。その息子…。そしてこんど行つて、やつぱりブサロー、
ブサローて音すつずも。丈夫な帯持つて行つたから、

「毎日、そんなこと言うてる者、何ものだ。おらえの家さ連^つで行んからブサレ」
て、丈夫な帯持つて行つて背負^{おぶ}つたど。いや重いは重いわ。ここの父ちゃんな
ど炭の二俵も背負つても、てんでん降りて来んな、やつと重くて降ろしたずも。
そして家さ来て、まず板の間さ置いて、

「こんな重いもの、板、傷め^{いた}つど大変だから」
て、土間さ降ろしたずも。ドシンというげど。

「ああ、朝げにおらえのばば、年寄って何でも心配すつから、こんな何か恐つかないもの出はつど悪いから、誰も起きないうちに、まず一番先に、おれ見なんなね」

て、そして早く起きて電灯のあかしで、そろつとはぐつて見たば、入っていたわ、入っていたわ、大判に小判に、こがな入れものさ、いっぱいであつたど。そしてあんまりその息子働いて孝行息子だから、そさ授いたなであつたけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

10 大入道の話

むかしあつたけずも。ここから新股さ行くようなところの、山道を通って行かねばなんね場所あつたど。

そこんどころに、いつともなしに大入道が出るという話が出たずも。夜行ぐど大入道が出るというんで、夜は誰もだんだんに通らなくなった。んである時に、「そんなことないべえ、おれあ行つてみんべ」

と言うので、荒気こぎあ、提灯を点けて、トコトコ、トコトコと行つた。途中まで行つたところが、沢のところに降りて行つたところが、向うの方から大きいものが来た。どうも、ひどく大きいものある。三丈もあるような入道だ。それで提灯点けて行つた大將が提灯をそこに投げつけて、村さ歸つたわけだ。

「大入道、本当に出る」と。

「とても恐つかなくて、あそこに行つては駄目だ」

と、こう言つたところが、村の人だちの中に、

「何、おまえ、常に荒気こいでいっこ、そんな大入道なて出るもんじやないんねが、この世の中に化物なんてあつて、たまるもんでない。お前、そんな嘘語つてみたて、それまたお前のデホダレだべ」

「いやいや、あれ、本当のことだども、おれあデホばり語つていたども、こんど

のことは本当のことなんだから、お前嘘だと思うなら、お前行ってみろ」

「そんだら、そんな大入道なの出て、お前なじよして帰って来た」

「おれあ、提灯、仕合せなことに持つて行つたもんだから、提灯投げつけで、そして帰ってきたんだ」

「んだか、んだら、おれあ提灯持たねで行つて見つか、必ずおれあ行つて隣村さ泊つて明日帰つて来つからな」

こう言つて出はつて行つた。

「なんだごど、語つて行つた。大入道におんつあれでもしなば、ええな」

と言つて、まず荒氣こぎは行つたど。そしてその次の日になつて、待つてでも帰つて来ない。

「こらあ、どうしたことだべ」

て言うんで、不思議に思つていたところが、その道の真ん中に殺されていたところを教えて呉つた。

「あそこで殺さつただ」

と。ほんでまず、仕方ないから、村につれてきて、茶毘だみ出して終したずも。ど、そこんどころに侍が来て、「お前たち何だ」ど。「こらあ茶毘出した」「何したんだ」「いやいや、これ非常に荒氣こぎで、大入道出るて言うども、こんなものはあるもんでないて言うて行つたんだ。途中で殺さつたのだ。何に殺さつたもんなんだか、見た人ないから、分んねんだ」「ほうか、そんなことで、お前だも困んべ」「いや、困るどこの話でない。こんな出ないで呉ればええなだども、どうにも仕様ない。われわれの力ではどうもなんね」

「よしよし、ほんじゃ、おれ、退治して呉れっから」

「いや、お侍さま、それ退治などして呉れっこんだら、まず、ほんにありがたいことだ。おらだも、お侍さんの家来になんべ」

「んで、どうやって行つたんだ」

「提灯持つて行つたのは、提灯投ぶつけて帰つて来たど。持つて行がねものは殺さつたんだ」

「んだか、んじゃ、おれも提灯持つて行くと、おれんどこなど、大入道の方でも

恐つかなぐなつて、寄つて来づがんねがも知んねがら、おれも持つて行かねべ」

こう言つて、提灯持たないで、夜になつど出かけて行つた。

「いや、こりやええあんばいだ。なんぼ化物が強い^くつたつて、あの侍、髭も立てっだけし、刀も持つていることだから、退治して呉^{くれ}んべ、ええあんばいだ」

て、村人は次の日の朝げ待つていたど。んで、帰つて来ないもんだから、村人と一緒に行つてみたところが、刀に手も掛けないで、喉笛嚙み切らつて、バツタリ倒つてだ。そうして、仕方がない、こんどはみんなでこの侍だかも分んないもんだし、葬式を出して、茶毘終わつて、そしてこんど討議しつた。そこの村の一番の年寄りが、

「いや、これは大入道は、おれ退治してくる。おまえだも困んべし、おれはこの年になつて退治しぱぐつて、この侍みたいになつたら、お前だ茶毘出して呉れるだろ、おれ退治してくる」

こう言つて、討議の場所から杖棒ついで、トボトボ、トボトボと隣村さ行つた。そしてものの一刻も経つたかと思う頃に、コトコト、コトコトというて帰つて来

たど。

「こんど、お前がた、あれだぞ、大入道は退治したぞ」

「なんだ、じんつあ、そんな、その、早っから帰ってきて、大入道退治したなて」

「これだ、これだ、大入道はこれだ」

何だと思つてみたところが、それはミコシイタチであつた。ミコシイタチのこんな小さいのを、プラプラと、こ^たう持つて、

「大入道、これだ」

「じんつあ、また、おらだば騙^{だま}すのでないか、そんな馬鹿なことあるもんでない。

大入道なていうの。これだど。こんな小さいもんでない。どうやった」

「いや、これはな、おれも行ったら、向うから大入道が来た。それで大入道が来たけれども、おれも行った。杖棒ついだから、向うが来たとき、ぶつつがるもの杖棒が先にぶつつかるわけだから、行ったんだ。そしてこのぶつつかりそうになつたとき、土際をないだ。そしたら、パシューと当つたのが、これだ。それと同時に大入道が消えてしまつたんで、今までの化物はミコシイタチだ」

て言うた。

「みんなば、上向かせて、喉笛を嚙み切って血吸うために、その大入道になったんだぞ。お前がた、これ知しやねがったんだ。これ、荒気こぎも可哀そうなことしたし、お侍のどこも可哀そうなことしたども仕方ないごで。まずこれで今度は出ないからな」

と言うたど。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

11 土蜘蛛退治

むかし、あるところに、長者がいてあつたど。その長者に、きれいな娘がいたもんだから、可愛いがつて長者は育てておつた。そうしたところが、ある時にその家にきれいな男の人が尋ねてきて、泊つたど。そうしてその娘と、若い男だ

から仲よくなった。それで若い男は帰って行っただけでも、時々その娘のところに通ってくるようになった。そしてそれがだんだん月日が経つに従って通ってくる回数が多くなって、夜になると、こんどは来るようになった。んで夜になって、その若い男が通って来ると、娘が非常に苦しがる。もう大変な苦しがりようだ。んでこんど、長者も、

「非常に、これあ、きれいな立派な男なんだけれども、どういふことなんだろうか」

て、不思議に思つて、娘のところへ、

「お前どころに、じきにあの若い男あ来るんだけど、着物の端に、針さ糸つけて刺してみろ」

そう言つて教えたところが、娘も夜苦しいもんだから、どういふことだか不思議に思つていたもんだから、その長者のいうことを聞いて、針さ糸つけたのを留意して、来たとき、着物の端に縫いつけた。そうすつどその今までのきれいな男が、キャツと音を立てると消えてしまった。んで、娘もすうつと楽になった。

んで、長者がその大きい音に、魂消て行つてみた。ところが娘が言うには、「お父さん言う通りに針で縫ったところが、あんな大きい音立てて、いねぐなつたんだ」

と、こう言う話だ。そんなことをやっているうちに、夜は明けて明るくなつた。見ると、ポタリポタリと血の跡がある。そして長者は、

「これあ、その何か化物だかも知んねえぞ。おれ一人では駄目だから……」

て言うもんで、村人どこ頼んで、その血の跡をずっとたよつて行つた。そうしたところが、寺の傍からずうつと登つて鎮守さまの脇を登つて、ずうつと登つたところまで行つて、この土の中に、ずつと入れるところさ入つて行つた。それで、「これは土蜘蛛でないか」

て言うことになつて、みんな村人は唐鍬からトキ。パシから、鉄砲から槍から持^たつて行つて、その土の穴を掘つて行つた。掘つて行つたところが、土の穴の底のところ、七尺もあるような大きな蜘蛛が針に刺されて苦しんで、目をむいてギラギラていわせつた。それをみんなで寄つてたがつて、槍で突いたり、いろいろし

て退治したけど。

んだから、あんまりきれいな男さなど、目呉れるもんでないど。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

12 古屋の漏

荒屋で非常に困った百姓でありながら、すばらしい馬を持つておった。

んで、ある秋の夜、雨が降ってきて、雨漏る。狼は馬をとって食いたい。馬喰はそれを盗みに入ったわけだ。んで、狼は厩に入ったところが、じいさん、ばあさん話している。何と言ったかと言うど、

「世の中には恐いものは、化物はいるし、鬼も何もいるけれども、古屋の漏るくらいおっかないものはない。なあ、ばば、ひどいぜ、まず、こんな恐っかないも

のではないぜ」

と。そして寝た。狼はそれを聞いて、

「古屋の漏るて何だろう。化物よりも何よりも恐つかないて、何だろう」

そのうちにガサゴソ、ガサゴソていうの来た。で、隅にひつついて、隠つておつたところが、やにわに、タテゴかけらつた。そして、取り出したところが、人間がゴローッ。んで狼が馬のタテゴをかけらつて、馬喰をのせて一目散に逃げて行つた。その音で氣イついて、じさばさ、戸じまりをみっちりした。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

13 大まくりの話

若衆、寄合餅搗いたど。毎年のことなもんだから、ここら辺りの若衆、やると同じように、みんなで食うたけの餅を搗いたわけだ。それを。したら中にコツナ

シな野郎いて、

「どうだ、おい、これを一人で食^かれる人いたか」

て言うて、盆に山盛りに、五升餅をあげて持ってきた。そしてところが、

「おれ、食うべ」

「食うはええども、お前がた、どうするんだ」

「いや、それはお前んどこさ、寄合餅のかかりは掛けないし、お前んどこ何かこんど手伝いでも、村でおらだ一日行くべ」

「そうか、それ食いさえすれば、おら家さ一日みんな手伝いに来つか。掛りは今日はかけねか」

「それさえ食えば、それだけだから、すんべ」

「んじや、おれ食う」

と言うのが、現われて餅を食った。そしてだんだん、だんだん食って行つたれば、何といつても五升餅だから、なかなか入って行がねぐなつた。始めのうちはあたり前にして食ってだげんども、だんだん、だんだん背骨を真つ直ぐにして食つ

た。ほんでも入って行かなくなつたもんだから、こんどは柱さ押つかがって、ずうっと背中伸ばして腹ゆさぶって中さ入ってやつては、押込み、口あければ見えるようになったなを、中さ入ってやつては押込みして、べろり入ってやつてしまつた。

さあ、入ってやつたはええども、こんどは水も飲めなければ曲がりもさんね、なんとして呉れんべかな、これはどうも皆んないたところで出すわけにも行かぬから、というので、ソロッと、ホラ吹きは後の方から山さ行つた。山さ行つたら、滝あるはずだから、その滝さ口つけて飲めば水も飲めんべと、ほんでずうっと、ソロリソロリと歩いて行つたどこ、どうもこわくて、腹に入っているもんだからわかんね。土に腰掛けて、デカンとして休んでいた。ところが向うの方から蛇体きた。ノロノロ、ノロノロときた。ところが見るというと、腹の真中が抱きつかんねほど大きくなつてだ。

「おれも、あれと同じように腹ふぐらしつた」
て見つだところが、蛇体はそこに生えつだところの草をパクパク、パクパクと

食った。

「何しんだべ、蛇体、あんなもの食って、何なんだべなあ」

て見っただところが、そのうちに腹がすうつと細くなつて、ゴロゴロ、ゴロゴロと来たのが、こんどすらすら、すらすらと帰って行つてしまつた。

「はあ、あれを食えば、腹空^すきんだ。ほう、おれもあれを食えば腹空きる」

と言つて、草を食つたわけだ。一生懸命になつて草食つた。こんど若衆の方では寄合餅みんなで食つて、

「あの野郎にばり、いっぱい食せたもんだから、みんなで食うのが、ちいとであつたな、どうも今日はうまくないなあ、あの野郎、どさ行つたべ。いねぐなつてしまつた。どさ行つたべ、まず」

て、家さ行つてもいない、あつち探してもいない。こつち探してもいない。裏口の方見つど、山さ行つた跡ある。ずうつと行つてみた。したどころが、木の根つこのところに、お供え餅みたいな餅だけ、ストーンと残つていたけど。むかしどーびん。

「なんだ、じんつあま、そんなこと語って…」

て聞いたら、

「それは、蛇体は人ば呑んで来たんで、その草食うど、人消える草なんだから、餅食った男もその草食ったから、人の方消えて餅残ったなだべ、そういうのだべ。分んねなだか」

(塚原名右エ門)

14 鬼と豆の食いくら

むかしあつたけど。

あるところに娘と父親と二人いであつたど。なんぼかええ娘であつたど。ほしたらこんど、山に鬼が、その娘を見込みつけてしまったど。そしてはあ、毎日のように、

「欲しいから呉ろ。欲しいから呉ろ」

て来るごんだど。親父も困り果ててはあ、

「何としたらええもんだか、一人娘、鬼になんて呉くつだくないもんだ」

と、こう思っていたど。そうしたら、娘、

「ほだら、おどつつあん、おどつつあん、あの、豆煎りの食いくらしろ、そして負けたら呉れる。とこういうことにしろ」

て、こう言うたど。

「そんなこと言うて、鬼のぐらいなの食かんねぜ」

て、こう言うたど。

「おれ、何とか工面しておくから…」

て、そう言うて、鬼来たとき、

「おどつつあと豆の食いくらして、勝つたらもらわつて行く」

て、こう言うたど。そしたら喜んで、

「あまりええ」

て。それからこんど、娘一生懸命で豆煎つて、鬼には娘のところばり見とれて
いるもんだから、知しやね振りして小石混えて鬼の豆さやつたど。こんど固く煎つ
てやつたど。父親なは、柔やっこくええあんばいに噛めるようにやつたど。一ガラ
―茶ホウジ一つのこと―ずつやつたど。鬼は噛むと固いなガリツと噛まさつでし
まうど。んだもんだから、困っているうちに、父親は皆食つてしまったど。そし
てこんど、

「いや、今日は何だか、おれ、齒悪くつて、今日は駄目だから、また後で来つか
ら後でまた何か考えてて呉くろ、そんな時、また競争すつから…」
て、鬼帰つたど。そしてまた来たきんだど。そしてこんど、

「ほんだら、縄ない、今日はするが…」

て言うたど。そして藁、父親なは、柔らかく打つておいで、ないよくしておい
たど。鬼の縄、あちこち打つておいで呉くつたど。そうして一生懸命でなうじど、
鬼夢中になつて縋たつてるうしろさ行つてはあ、そおつと鬼の縄切つて父親なさ、
こう足たすたこんだずも、娘うしろさ行つてな。そしてこんどその藁、鬼のどさも持つ

て来るぞ。そして縋ったのな、一尋、二尋とたごんで置くわけだな、環にして、そしてしまいに縋い上げてから、たごんでみたら、父親の方多かったぞ。そして、「やっぱり、おらえのおどつつあには敵わねから、お前みたいない下手な人さは嫁か
んね」

て、娘にそう言わつて、鬼もあきらめてあつたけど。利巧な娘であつたけど。
むかしとーびん。

(川崎みさを)

15 かくれみの

ある村に、おじいさんとおばあさんと二人暮ししていたけど。そうしてこんどおじいさんは山さ畑つくつてで、その草取りに行ったずも。そして、

「あんまり暑いから、休むかな」

て思つて、尻ついて、

「夕方にもなつたし、休んで帰りましょう」

て思つて、休んでだら、何だか人の喋るような声すつずもな。よつく聞くど、何か洞穴にでもいたでないかと思うような感じすつけから、ずうつと声する方さ行つたど。そうしたば木の壕洞ごうらつて言うわな、朽ちて中穴になつていたどこさ、そこさ行つてみたば、天狗二人いたけど。そうして何しつたと思つて、そつと覗つて見たば、二人で踊りおどつていたど。

一飛べ 二飛べ

一飛べ 二飛べ

てはあ、二人ではね上つて踊つていたつけど。はあ面白こたそうで、じんつあ耐えらんねから、「おれも嵌つてみましょう」て、「一飛べ、二飛べ」て入つて行つたずも。そうすつど天狗、よろこんで、よろこんで、三人で、

一飛べ 二飛べ

おれも嵌つて 三飛べ

て、しばらく踊って、

「あまり上手だから、帰るときに駄賃に、かくれみの呉れてやる」

て、蓑もらつたど。そうして余程いたましい羽根だども、飛ばんねど悪れから
「この羽根つけてやつか」

て、羽根二本つけて、その蓑もらつたど。そしてこんど、

「どがえだか、飛んでみつか」

て、その蓑着てゐるうちに、ぐうつと飛んで行つてしまつたずも。そしてこんど、いま少しで家さ行き着くようになったども、とってもオシッコ出てはあ、堪えらんね。かくれみの着たまんま、オシッコしたずも、飛んでて……。そうしたば、そのかくれみの、せっかく前合せ^あつたな、そこ孔あいてしまつたど。村の人は、「なんだ、アレだけ飛んで行く」て見たど。そしてそこだけ出して家さ帰つたれば、ばさ、そこだけ歩いてるのを見て魂消たど。

「ばさ、ばさ、いまちいとで家さ帰る頃になつたば、オシッコ堪えらんねで、小便たつて、かくれみのさ孔あいてしまつて、あんばいよく飛ばんねけがら、ここ

僅か歩いて来たども、天狗さまにこういうものもらって来た」

て、そうして大事にしまっていたど。

したば、そして次の日になったば、天狗、

「じんつあ、じんつあ、何としまった」

て来たずも。して、

「昨日はええ・蓑もらって飛んで来たども、家さ、いまちいと来るときはあ、オシッコ堪えらんねで、途中で飛んだまましたら、肝心などこ孔あいて、チンチン出はるようになった」

て言うたど。そしてこんど、

「んだら、これ貼って呉れっから、おらいたどころさ来い。着て来い」

て言わつで、それ修繕してもらって、またその「みの」着てその洞穴さ行っただ。そしてまた、

一飛べ 二飛べ

おれも嵌って 三飛べ

てはあ、楽しく踊って、そしてこんどは大丈夫にしてもらって、そのかくれみの着て家さ帰ったど。ほしたれば、ばんつあは大喜びしたずも。むかしとーびん。

(高橋しのぶ・川崎みさを)

16 寝言兄弟

むかしあったけど。

男の子どもばかり三人いて、毎晩同じ寝言語る兄弟であつたど。そして兄の方は「そーそとござった」て言う寝言であつたど。それ、泥棒が知しやないで、そこの家さ入って、一つ何か盗むべと思つて行つたど、軒場まで……。そしたらちやうど寝言の始まる時分であつたど。そして兄始めたずもの。

「そーそとござった」

て。そうすつど泥棒あ、「これは見つけらつたな」て思つて、しやがんだど。と、

二番目はこんど、

「しゃかたまつてござった」

て。そうすつど、「いや、こんでは駄目だ、見つけらつてしまった」

と思つて逃げ出したど。そしたら一番小さいのは、

「どこまで行つても、テンビン棒」

て、こう言うたど。そうしてはあ、泥棒、「いや、こんなおつかない家さ、二度と来らんね」

て、そう思つてはあ、泥棒来なくなつてあつたけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

17 篩 借 り

あるところに、じんつあとばんつあいだけど。して、春になつたけれども、種

子蒔きしようと思ったが、豆の種子を持たぬ。それで神さまに行つて、一生懸命にお授けを願つたど。ところが種子が一つ手に入つた。それでその種子を持つて帰つて、半分は黄粉、半分は種子にしようということで、二つに分けて、半分をカラカラ、カラカラと煎つて、臼に入れて、カンコン、カンコンとはたいた。篩でふるおうと思つたげんども、篩うものあない。貧乏なもんだから、篩うものはない。それで、じさまの禪の端をのべて、それで篩の代りにしてふるつた。

そしてるうちに、じさまが間違つて、屁ブーツとたれてしまったところが、その黄粉が全部、もやもや、もやもやと川向うの山に行つて、木の葉さ喰付いてしまった。んで、村中の子どもらが集まつて、指さペターツとつけては、ペロツとなめ、ペターツとつけては、ペロツとなめ、ペターツとなめ、ペターツとつけては、ペロツと…。

（塚原名右エ門）

18 鴨 とり (1)

むかし、あるところに、鴨とったり、貉とったりして商売にしているじさま、いであつたずも。このじさまというのは、鴨とり上手で、秋になつど、沼さ行つてその鴨とつてくるなだけど。そして、その鴨あどうやつてとるかというど、延べ縄を張つてとるのだけど。こういうとこまでは分るども、誰にもその秘伝というものを教えねがつたじんつあであつたど。そのじさまは、

「おれあ、お前がたと違つて、鴨とりあ一番上手なんだから」

と、また自慢こぎで、人からどうもあまりよく言わんねじんつあであつたど。そのじんつあが、ある年の秋、いつものところさ延べ縄を張つていたなさ行つて見たところが、鴨、ずいぶんいっぱい掛かつたわけだ。それでじんつあはその鴨、キイツと首をひねつて、そして腰に一羽さし、またキイツとひねつては一羽さし、またキイツとひねつては一羽さし、そしてずうつと腰の帯んどこさ、ひねつてさしたところが、帯いっぱいに鴨なつたど。そして、じんつあがひよつと油断した

ときに、一羽の鴨がバタバタというど、その鴨がバタバタ、バタバタって飛んだもんだから、じんつあは空高く舞い上ってしまったど。

そうしてずうと高く上って行ってしまったて、そうしているうちに、みな元氣ええぐ羽ばたくもんだから、その、鴨一匹抜け、二匹抜け、三匹抜け、抜ければ抜けるほど、帯がゆるんできたもんだから、鴨みな逃げてしまった。じんつあは真逆さまに下さ落ちてきた。て、こんど下さ落つた拍子に、目の玉二つ、ベロリ何処か吹飛ばしてしまった。それから、じんつあは困ってしまったて、

「やれ、目玉なくなつた」

て言うわけで、その辺のところを一生懸命に探つたところが、丸こいもの二つ見つかった。

それでこんどは、まず目玉をはめて、

「どうも見えない」

もう一つ元通りに嵌めたら、見えるようになった。それでまず、

「今日はひどい目に会った。こんなこともあるもんだか、さあ、どうもひどい目

に会った。が、自慢こきしたおかげなんだか……」

なて、考えながらその日は家さ帰ったど。そしてこんどは、家さ帰っているうちに、だんだん頭病^やめてきたど。そして「頭病める、頭病める」ていたところが、この目のどつから、栃の木^の芽出てきた。さあ、その栃の木あ大きくなつて、実なるようになった。さあ実なつたもんだから、じんつあ、鴨とりあしたいげんども、栃の木、邪魔になつて、鴨とりは行かんねし、仕事はできないし、仕方がないから、栃の木の実を、「トチ、トチ」と言つて売つて歩^あるつたど。ほうして栃を売つて、まず暮^あしつたわけだが、そのうち栃の木、枯れてしまった。んで、枯れたもんだから、まず邪魔になる栃の木枯れたもんだから、

「なんだ、じさま、邪魔になる栃の木、枯れたな、喰^あ付けて歩^あるつてはうまくないから」

て言うて、隣近所の衆が寄つてたかつて、じんつあの栃の木、鋸で挽いてとつて呉^あつたど。そしてところが、こんどはその栃の木の根っこさ、ナメコ出た。ナメコ出たもんだから、じんつあは、

「これあええあんばいだ」

て言うんで、「ナメコ、ナメコ」て言うて、そのナメコ売りして暮したど。ところ
ろがナメコ売りしているうちはええがったども、木あだんだん腐つてきて、真中
に窪み出てきて、ナメコも出なくなつたど。窪みのところさこんど水溜つたずも。
水溜つたときさ、手そろつと入つてみたところが、コチャコチャ、コチャコチャ
て音立てる。なんだと思つてみたところが、こいつあふナ溜つていた。それで「フ
ナ、フナ」て売つて、じんつあは暮したけど。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

19 鴨 とり (2)

むかし、あるところに、鴨とったり、貉とったりして商売にしているじさま、
いであつたずも。このじさまというのは、鴨とり上手で、秋になつど、沼さ行つ

て、その鴨とつて来るなだけど。そして、その鴨とつてくるのだけど。そしてその鴨あどうやつてとるかというど、延べ縄を張つてとるのだけど。こういうところまでは分るど、誰にもその秘伝というものを教えねがったじんつあであつたど。そのじさま、

「おれあ、お前がたと違つて、鴨とりあ一番上手なんだから」

と、また自慢こぎで、人からどうもあまりよく言わんねじんつあ、いであつたど。そのじんつあが、ある年の秋、いつものところさ延べ縄を張つていたなさ行つて見てみたところが、鴨、ずいぶんいっぱい掛つたわけだ。それでじんつあはその鴨、キイツと首をひねつて、そして腰に一羽さし、またキイツとひねつては一羽さし、またキイツとひねつては一羽さし、そしてずうと腰の帯んどこさ、ひねつてさしたところが、帯いっぱいに鴨なつたど。そして、じんつあがひよいと油断したときに、一羽の鴨がバタバタというど、その鴨がバタバタ、バタバタつて飛んだもんだから、じんつあは空高く舞い上つてしまつたど。

そうしてずつと高く上つて行つてしまつて、そうしてゐるうちに、みな元氣え

えぐ羽ばたいたもんだから、その、鴨が一匹抜け、二匹抜け、三匹抜け、抜れば抜けるほど、帯がゆるんできたもんだから、鴨みな逃げてしまった。じんつあは真逆さまに下さ落ちてきた。て、こんど下さ落ちだ拍子に、目の玉二つ、ベロリ何処か吹とばしてしまった。それからじんつあは困ってしまつて、

「やれ、目玉なくなつた」

て言うわけで、その辺のところを一生懸命に探つたところが、丸こいもの二つ見つかった。それでこんどは、まず目玉はめたど。ところが、あまり気揉んではめたもんだから、一つは腹の中見えるように、一つは表が見えるように嵌めてしまったど。さあ、こんど腹の中の状態が、片目で見えるもんだから、ちよつとそのじさまが、腹痛いて言えば、あそこ悪いなだ。頭痛いて言えば、あそこ悪いなだ。ここ悪いなだ。腰痛めるて言えばここ悪いなだつて、みんな悪いどこ分るようになった。

それでじさまはこんど、

「いやいや、これはいままで、おれは殺生をしたんだが、こんどは何とかみんな

の為になれっか」

て言うので、頭痛いて言う人には、

「あそこ悪いなだから、こうせば治る。この薬飲みなさい」

腰痛める。

「んじゃ、これあ腰痛めっこんだら、ゲンノシヨコ煎じて飲め」

て。こんどは出きものできた。

「ああ、それあ、その腹の中どこ悪いのだから、ドクダミ煎じて飲めばええし、その創口さはトクダミを火所^{ほど}でいびって貼れば治るんだ…」

と、そう言つて教えて、その辺りでの一番の名医になつたけど。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

20 南の兄んにや ― 南の山の馬鹿聾 ―

(1) クキナ漬

酒盛りも終ったもんだから、

「聾どの、聾どの、湯さ入ってござれ」

て言わつたども、聾どのの湯さ入る術知しやね。何せえええか分んねもんだから、もじもじしていたところが、仲人が脇すびにいて、袖引っぱる。袖など引張つたつて、湯さ入らんね。「こゝう着物脱いで入んのだぞ」それで、その場所で脱ぎ始めた。

「こらこら、風呂場さ行つて脱げ」

て言わつて、風呂場さ行つて、流しさ行つて、脱ぎ始めたぞ。禪したまんまで湯さ入るべど思つたら、手伝いに來つたところの女衆が笑う。で、

「なんだべ、聾どのの禪したままで、湯さ入んなだべか」

と言うことで笑った。んで仲人が魂消て来て、「それも取って入れ」と。それを脱いで風呂に入って、入ったところが、熱くてとても入れるもんじゃないで、キンタマ、がんがんで言うのを押えて、

「手伝い衆、手伝い衆、熱くて仕様ないから、クキナ漬け呉つておくやい」
て言うて、もらつて食ったけど。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

(2) 数の子

南のあんによ、仲人と一緒に寝っただども、昼間食った数の子の味がどうにも忘れらんね。

「ああ、うまくてうまくて、どうもいま一度食ってみただくて仕様がな」
それから、こんど、そろっと起きて、水飲むふりして、流しき行ってみたところ

ろが、甕があつた。甕そろつと覗いてみたら、その数の子が入っていた。それで南のあんにやは、甕の中に頭を突込んで数の子食つた。一生懸命になつて。数の子食つた。そして取んべと思つたところが外さ行つて、かがんでいた。畑の隅に行つて、どうしたらええべと思つて、こうしていた。

ところが、仲人が出てきて、便所^{せんち}さ入つたど。便所さ入つたところが、あいにく紙も柿葉もないがつた。ほんで仕様ないもんだから、表まで出はつてきて、畑の傍まで来て、石で尻^{けつ}、パエツと拭いて、石、ポーンと投げてやつた。そしたら甕さ、カーンと当つて、ザクツと割れた。ほしてヒョコツと立つたどころが、仲人は、

「なんだ、あんにや、何しつたんだ」

「まず、甕、頭から取れなくなつていたな、おれあ丁度お前に石ぶつつけてもらつて、ええがつた」

て、寝たわけだ。

次の日の朝になつて、また酒盛り始めると、仲人は。鶴亀の話をつたつた。

「池のみぎわのツルカメは……」

と言うど、聾は「石で尻けつ、石で尻、そう言うてだっけど。むかしどーびん。

（塚原名右エ門）

21 和尚と小僧

和尚と小僧が、旦那の家さ行ったところが、橋のところ、『この橋渡るべからず』という立札が立っている。で、和尚さんが先になって行って、

「この橋渡るねで、どうして行く」

「いや、お師匠さま、お師匠さま、これは旦那さまが親切で、端を渡つど年寄に子どもだから、川のこの下の堀さ落ちつどわるいから、旦那さま、親切に真中渡れていうので、この端渡るべからずと書いてあんなだから、真中渡って行くべ」
こう言うて、渡って行った。んで、お勤めも終って、いよいよ御馳走になると

きに、旦那さまが、

「小僧、小僧、お前は字見えねなだか」

「字は見たものは、見えるし、見なかったものは見えないし…」

「橋んどころで何見てきた」

「この橋渡るべからず、と書いてあんの見てきた」

「なして、おまえ橋渡ったのだ」

「端、渡んね」

「どこ渡った」

「真中渡った」

「なして真中渡った。あれも橋だ」

「いや、あの橋はきつと旦那さまの家の橋だとも、端の方さ上がるとヒックラ返えつか何か危いから、端は渡つては悪いて言うので、立てて呉つだんだべと思つて和尚さまとわたしは真中、そろつと渡つてきた」

て言うたど。

「んだら、このお汁はうまいお汁なんだげんども、蓋とらねで食え」

「お寺さまは蓋とって食うもんだ。蓋とって食うもんだて教えていんな、蓋とんで食えなんて、そんな無理なこと言うて、おれは食うわけに行かない」

「どうでも、蓋とんで食え」

と。「はい」。そんでお膳をもつて、旦那さまどこに行つて、

「どうか、蓋押えて下さい。蓋取らないで、私上がらせていただき申すから、蓋逃げつど悪いから、がっちり押えて下さい」

「よしよし、押えていっぞ」

お膳をすうつと引っぱつてもつて来て食つたど。それでまず家に帰つたところが、旦那が寺に遊びに来た。

「小僧、小僧、今日何した」

「何したて、お寺さまから、いろいろ教えてもらつて居り申した」

「ああ、そうか、なかなかええ小僧だな、お前は……。ついではそのお前は、生臭なまぐさを食ねという、嫌うという。どうも寺の中を見ると、生臭がある」

「何だべ、旦那さま」

「一番先に太鼓だ。あれは皮だ。生臭でないか、なんで、こともあろうに仏さまに飾っておくのだ」

「はい」

「んで、それと同じように、旦那さまのその毛皮のちよつきも、してもええがんべか」

「いや、ええどこでない。その通りにしねばなんねえごで。お前。同じ待遇してもらわねでは、どうもおれも氣持が悪い」

「はい、しばらく待って下^{くだ}だれ」

そして本堂からバチを持ってきて、お経を上げ始めると一緒に、背中からそのバチで旦那さまんどこ叩いたけど。

「いやいや、小僧待ってくれ、待ってくれ。今日はおれも負けた」

こう言うことだったけど。

（塚原名右エ門）

22 おつかなくて、おかしくて、むごさい話

ほがえに、ほがえに、お前がた昔話聞きたい、聞きたい言うんなら、今夜はあの、おつかなくてな、うんとおつかなくて、そしておかしくて、むごさい話して聞かせつべがな。

むかしあつたけど。あるところに大きな鬼いだけずも。顔が真赤で、背が七尺もあつて、角が二本生えておつて、大きな鬼いだっけどい。そうしてな、見つど誰でも、ほら、鬼はおつかないべあ、なあ、恐^おつかないべあ。

その鬼がな、屁ブウツとこいだずも。なあ、屁ブウツとこいだんだぞ、おもしろいべ。お前、な、おもしろいべあ。ほしてな、屁こいだどきにあんまり大きな屁こいだもんだから、ゴロツと死んでしまったどヤイ。なあ、むごさいことしたべあ。なあ、むごさいがつたごど。そんな大きな鬼、屁こいだけで死んでしまったどヤレ。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

23 栃

餅

むかしあつたけど。おれみたいな婆さま、どさも行けぬで、山、大好きなもんだから、山さ遊びに行つたらずもの、そしたば大した何も採らんねけども、秋の彼岸頃に行つたもんだから、栃一つ拾つて来たど。それから家の下手の道傍さ植えつたらば、ずんずんおがつてはあ、実なるようになったずも。そうして秋の彼岸のあたりは毎年台風つよく、こつちさ当つて来るもんだからな、栃の口開いたどこさ大風吹いて、ゴーと吹いて来つど、ポターツと落ちては、くりつとむけてはプンプラ、プンプラと流れつずもの。その土手の堀さ。

「ああ、また落ちた」

て、子どもら行つてはあ、箒つけて拾つて二・三十拾つたから、
「これあれば、たくさんだから、まず餅搗くべ、正月まで待ちていらんねから、すぐ搗いて食うべか」

なて、搗いたど。そしてこんど、餅搗いたども、はあ、どさもやんねで食べて

しまったずも。そうしたらば、隣の家の息子、

「とんとん隣で栃餅ついたども、おれ行っただも呉んね、かかカン鍋貸すな、じさズイ貸すな、とつつあトックリ貸すな」

て言うたけど。

んだから好きなもの、隣でないときは、分けて上げるようにするもんだけど。
むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

24 むかしむかし

むかしあつたけど。

ある旦那さまのおばあさんいだども、おれみたいに足わるいか何だかして、ど
さも行けないで、

「むかし、たくさん聞きたいな」

て、毎日言っただけ。そしたば、ある賢い息子、それ聞きつけて、

「お代官さまから触れもあったし、おれ、たくさんだて言うまで、語って聞かせ
て来っか」

なて、出かけて行っただ。そしてこんど、

「さあ、始めっぞ、ええか、ばばちや」

て言うたば、

「ええから、ええから、早く語って聞かせて呉^けろ」

して、

「むかしあつたけど」

て言うど、

「はい」

て言うずも。また「むかしあつたけど」て言うど、「はい」て言うど、「むかし
あつたけど」て言うど、「はい」て言う。一日そう言うて暮らしたど。そうしたら

ば、そのおばあさん、はあ、

「あの、おれ、触れ廻したなに、たくさん聞かせて呉れっど、馬八匹御褒美にやると、そう言うたどな。一日聞かせてもらってはあ、たくさん聞いたから、約束通り馬八匹呉つでやつから」

て、年寄りあてた馬、こわれた鉢つないで八疋の馬に八つ鉢ひかせて、そしてそれもらって帰って来たけど。むかしどーびん。

(高橋しのぶ)

25 さなか 沢中の喜太郎

小っちゃい時に、弟に、

「おれ、面白いこととして見せつから、庭さ出てみる」

「なんだ、喜太郎」

「まず、ええから来てみる」

て、オノガラ持って来て、

「見てろよ、おれ、これ登って行んから……」

なて、継いで登って行く、継いでは登って行く。見てるとずうっと登って行って、小さくなってしまうた。

「早かったなあ」

と思つて、親父あ見ておつたら、後ろから来て、肩ポンと叩いて、

「お父、何見っだ」

て言うた。この野郎はな、と思つているうちに、十三の時いなくなった。して、泥棒になつて、どんな錠でも、その場に行つて、手を三つ打つとビンと、ひとりで開いたど。

大阪の鴻池の倉にも入つて、千両箱を盗んだ。こういう泥棒が沢中から一人出てゐるんだぞ、お前。

泥棒をして逃げるときには、一日に四十里も行ったもんだから、とても追かけ

られるもんでない。出かけるときに、笠を胸にパツと当てたものを、そのままで落ちなかったど。

（塚原名右エ門）

26 渡 辺 綱

南大門の上に、夜な夜な不思議なものが現われる。そしてその宮中の屋根の上で、不思議なトリが啼く。で、そうやっているうちに、天皇が病氣になった。それを占い師に占ってもらったところが、

「南大門に化物が現われるために、不思議なトリも啼くんだ」

と。それで南大門に渡辺綱が行って、待ち伏せするわけだ。そこに夜、鬼が来る。んで、闇の中で一刀のもとに切り捨てたところが、腕を落した。その腕をつかんで渡辺綱は家に帰って行って、タンスに入れた。南大門には、それから不思議

議なものとは現われないし、不思議なトリも、宮中の屋根の上で鳴かなくなった。天皇も治った。

しばらくしておったところが、渡辺綱が小さいときに育てられたおばあさんが来た。

「綱、綱、お前は近頃、南大門で非常にすばらしい働きをしたということで、その祝いに、今日は来た」

「それで、その時の働きの品物を見せてもらいたい」

「おばば、おばば、そんなものは、おばばの見るもんでない。あんなものは見るもんじゃないから、そんな無理なこと言わないで呉れ」

と言うけれども、

「一生の願いだから、見せてくれ」

というもんで、綱が鬼の手を出して渡した。んで、ずうっと包んであったのを開いていったと思うと、左の肩にそれをピタッといけると、

「これは、おれの手だ」

と言つて、ブーンと逃げて行つた。と、都に夜な夜な人さらいが現われるようになった。それで天皇から頼光のところに、大江山の鬼を退治するようにという命令が下つて、こんどその、一に頼光、二に渡辺、三に金時、四に貞光、五に季武の五人で行つて鬼退治をしたど。

(塚原名右エ門)

27 曾呂利新左エ門

曾呂利新左エ門が太閤と碁打ちした。

「殿下、わたしに碁敗けたら、紙袋いっぱいのお米下さい」

「よからう、毎日毎日、お前に唯ばり負けていつから、今日はもし負けたら、紙袋にいっぱいのお米は、それぐらいのものは、おれも持っていたから上げんべ」

と。そして碁打つたところが、太閤碁で言うて、真似碁で打つたど。そして曾

呂利新左エ門が負かしたわけだど。

「紙袋持つて参り申すから、一廻りの御猶予を願いたい」

「ああ、よからう」

軽い気持で……。で、その間に曾呂利新左エ門は三十三倉入るだけの大紙袋を作つて、倉にかけて、

「殿下、あの袋で一杯の米いただき申したから……」

秀吉は仕方なしに、その倉に入っていた米呉つたど。という話。

それから、また、

「碁打ちして負かしたら、この城にある障子一枚、いっぱいの一文銭を下さい。ただし、それは一番始めに一文銭一枚、二枚目に一文銭二枚、三枚目には四枚、四枚目には八枚というふうに計算して行つて、これにいっぱい下さい」

「馬鹿に小っちゃこいこと語るな、天と地をまるめて飲んで、なんていう歌うたう大ボラ吹きのお前が、そんなでたくさんなのか、いや、よからう」

んで、やつて、また曾呂利新左エ門に負けて、そしてそのお納戸方に、それを

計算させたところが、とてもじゃないが、払えながつたんで、秀吉は曾呂利新左エ門に降参したど。むかしどーびん。

(塚原名右エ門)

28 西行法師

むかしあつたけど。

西行法師は毎日、旅から旅とずうっと続けて行くうちに、ある日小山越えて行かなね時あつたど。そうしてこんど、あそこ部落見えつども、いまちいとだも、「ウンコ出て、とても我慢でなくなつたから、ここらでウンコすまして行くべ」と思つて、ウンコして、そして立つてみたら、萩みたいで足で踏んでた上さ、ウンコしてあつたずも。そして避けつど、ピンとはねでしまつて、ウンコもはねたど。したらば西行法師、

西行はいかなる旅もしてみたが

萩のはが糞　これは初なり

て詠んで、またずっと山越えて行ったら、

「あら、いまして部落さ行くのに、またウンコしなくなったから、この窪地ですまして行くべ」

と思つて、こんど窪地さかがんで、またウンコしたど。そして下見ないでウンコして、すまして立ったら、蟹の背中さウンコしてあつたど。蟹、ウンコ背中さ背負つてはあ、わさわさと横さ出かけたずも。そうすつど、

西行はいかなる旅もしてみたが

糞の横這い　これは初なり

と詠んでまた行つたど。そしてようよう部落さ行き着いて、チリンチリンと鉦鳴かねらして行つたば、若いおつかさ戸開けて、福田餅ふくで半分呉つたど。その日は十五日であつたそうだ。そして夕方になつてから十五夜の月、あその山さ顔出しはじめたときであつたど。

西行はいかなる旅もしてみたが

十五夜の月の半月　これは初なり

と読んだずも。そしたらおつかさは芋を半分持つてきて、

月に半月なけれども

雲にかくれて　ここに半分

と詠んだけど。そしてこんど、西行はそうしたれば、

西行はここも旅　また行く先も旅なれば

いずこの旅にわれぞなるらん

と、そう詠んで、また立ったど。そしてまたずっと旅さ出かけたど。むかしとー
びん。

(高橋しのぶ)

29 義経と弁慶

むかしあつたけど。

義経と弁慶、戦いくさのとき、ある山の上で陣取っていたとき、

「何だか、弁慶、トロロ食いたい」

なて、こう言うたど。

「谷間さ降りたら山の芋掘られんべから、おれ作つて来るわ」

て、「御主人のござんだもの」て、弁慶降りて行つたど。義経、

「あんなこと言うて、弁慶は芋は掘られつかしんねえども、なじよにして播るもんだべ」

て、そう思つて、山の上さあがつて、弁慶は見たど。そうしたれば谷間さ行つて見て、山の芋あ見つけて掘つたど。やつぱりそのうちに昔のオベントウ、それさ弁慶、山の芋きれいに洗つて、ガリガリガリつと噛んでは、ホロキ出し、ガリガリガリつと噛んではホロキ出しすつどな。弁慶は……。そしてこんどは、ええ加

減溜ったとき、こんど味噌入っで、ガエロガエロかましてはあ、持って来たど。

「いや、ひどいもの、これは食せられるもんだ」

て、義経、そう思ったどなあ、そうして、

「弁慶、世の中で何一番汚ないと思う」

て、こう言うたど。弁慶は利巧な人であつたどな。

「人のすること見ないふりして見てる人が一番汚ない」

て、そう答えたど。仕方なくって義経は弁慶噛み出したトロロ食つてあつたけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

30 慶次之介と玉川太郎

慶次之介は下滝部落の、丸山という山の中ほどに、岩の――人間の顔にたとえれ

ば鼻のように出っぱったところ――洞穴に住んでいて、山でも川でも上手であつたといふので、今でも部落の人々は山の神のように信仰をして、旧二月十七日にお祭りをして、そこへお詣りに行く。けれど、出っぱっているのです、風当りが強く、雪が積らず、とても岩穴は誰一人見た方がないそうです。その下でお詣りして帰る。年々そうなそうです。そして部落の言い伝えには、金の茶釜があると言ふだそうです。

玉川太郎との喧嘩は、太郎が玉川の川にヤナのようなしかけで、真中を水を通して、そこにドウと此処では言う、細い木で編んで丸くしたものをつけ、魚をとる。それを作つて置いたから、慶次之介が魚をそつととつて逃げようとしているところを、太郎が見つけ、怒つて追いかけては、石を投げつけ、投げつけした。慶次之介はぶつつけられては大変と、駆けて駆けて、下滝のところを、五アゴにかけて、その次の山を駆けずつて、これは「駆けずり山」といふ。そして慶次の岩屋に逃げ込んだ。

今でも岩穴の下に山菜取りに行くとカランカランと音のすることもあるといふ。

31 もうけた話

むかしあつたけど。

あるところに、じんつあとばがいたけどなあ。とても貧乏な暮らしをしていて、いよいよ年明けの晩が近づいてきたども、何も食うものもなかった。そこでばばはじんつあに、隣の家に行つて屋根の雪落しでもやって、米の足しでもなるようなものを貰つてきて呉れと頼んだが、じんつあは、いやいや、おれは明日鴨とりに行つてくる。鴨取りなんてしたことねえから、隣の家に行つた方が足しになると、ばばが言うのに、じんつあは聞かないで、鉄砲かついで鴨とりに行つただ。

そうしたところが、鴨を見つけたんで、バンと打ったわけだ。犬っこつけて行かないもんだから、じんつあ、禪一つになつて、沼の中に入つて行かなくてはな

んねがった。禪一つになったじんつあは沼の中を泳いで鴨をとり、岸を上がつてきた。sonだども、股のところが随分重いなと思つて、禪、馬鹿に垂れ下がるなと思つたら、大きな鯉が。じんつあは禪が三年ぐらい洗わないもんだから、その鰓のところ^{あした}にシラミがいつぱいたがつていて、そのシラミに鯉がかぶさり、やつたわけだ。それ、岡にふり上げて、

「いんや、これはすばらしい、明日の晩の年取りには、鴨から鯉汁」

と、じんつあは^{あした}大して喜んだそうだ。そうしてじんつあは鴨と鯉を持って帰ろうとすると、鴨を打った流れ玉に、メス・オス二匹の兎が倒れていた。

「いんや、これはもうかった」

山兎二匹と鯉一匹と鴨三匹、ゆうゆう帰つてきた。そうして年越しの晩は大変な御馳走になつたど。むかしどーびん、カツパの屁。

（伊藤政雄「小国・昔ばなし」所収）

32 半 殺 し

むかしあつたど。

何かしようと商いをする商人が、ある峠のじんつあとばんつあが住んでいるところに泊めて呉れと来たんだど。そうしたら、そのじんつあとばんつあは、とてもよい人であつたもんだから、

「はあ、どうぞどうぞ泊って下さい」

というわけで、まずめつたに人の来ないとこだもんで、じんつあとばんつあは喜んで歓迎したわけなんさ。そしてこんど、夜になつたんで、商人に先に寝てくれというわけで、先に寝せたわけだ。そしてじんつあとばんつあは商人を寝せた隣の部屋で、夜遅くまで起きていて、

「ばさや、ばさや、お客さま取れたから、明日は半殺しにすつか、皆殺しにすつか」

と言いながら、じんつあは刃物研ぎをし、ばんつあはつくろいものをしてだん

だど。そうしたら、隣の部屋で寝ていた商人は、魂消て、

「こうしたら、半殺しにされるこんでは、いられねえ」

と言って、夜の明けぬうちに逃げて行つたど。むかしとーびん。

(渡辺てつ「小国・昔ばなし」所収)

33 意地つぱりの話

むかしあつたど。

山の中に狩人の夫婦が住んでいて、子どもがないので寂しがって暮しつたど。

ある年の冬、雪のものすごく降つた朝、おっかさんが先に起きて、入口の雪を払おうとしたら、ちよつと先の山に黒いものが見えるど。

「あれはきつと、山鳥に相違ない」

と、そう言うもんで、親父に教えなくてはなんねえといつて、

「山鳥だから、早く起きて来い」

と、そう言うて呼んだところ、親父は山鳥と聞いたもんだから、寒いげんども無理して起きてきて眺めたら、

「なあに、あんなもの、山鳥でねえ、木の根っこだ」

というもんで、おつかあ、「いや、ありや山鳥だ」。親父は、「木の根っこだ」と二人で争ったんだ。

「んだ、根っこだか山鳥だか、試しに鉄砲で打ってみんべえ」

と言うんで、親父さんが鉄砲でダーンと打ったところが、そうしたところが、山鳥であつたもんだから、パーツと飛んで行つたもんだ。そしたら親父は、

「飛んで行つたつて、根っこだと困った」

て言つたそうだと。むかしとーびん。

(渡辺好「小国・昔ばなし」所収)

わらべ唄

○ しみ雪わたり

しみ雪 ごりごり

じさばさ寝てろ

姉おきて 火焚け

兄んや 起きて 山さ行げ

しみ雪 ごりごり

○ 手まり唄

たんたん竹の節

四方れんげの花びらき

のっこめ とってこい

ひかえの山の 雨降り花は

夜ひらき 日中につぼみ

かわい○○さんに一丁貸し申した

受けとり申した

この日の短かいに

あたりもされまいし

二日におじゃしやれ

○○さん ○○さん

○ お正月はええもんだ

お正月はええもんだ

油のような酒のんで

木の葉のような魚食って

雪のような飯食って

お正月あええもんだ

○ カエロ・カエロ

カエロカエロ 年の数

一つ二つ三つ四つ五つ

六つ七つ八つ九つ十

バタ バッター

(オハジキの残り一つをとるときの唄)

○ お手玉唄

朝日に輝く 日の丸の旗

きらめく御国の軍艦どもよ

千島の果から沖縄までも

開びやくこのかた 異国の敵に

一度もこれまでだけがされない地

尊き海軍 まもれやまもれ

○ 一にたちばな

一にたちばな 二にかきつばたね

三に下り藤 四にしし坊さんは

手に蜂にさされて痛いとも言わず

かゆいとも言わず ただ泣くばかり

スッペラポンの

ポン ポン ポン

○ いっちくたっちく

(手指数え唄)

いっちく たっちく

もんない しょんない

太鼓のバチに カネが出て

チクリンチントノツコエ

ヒツコエ タマ ヒシ コブ コン

○ 一にたちばな

一にたちばな 二にかきつばたね

三に下り藤 四に獅子ぼたんね

五ついやまの千本桜ね

六つ紫 色よく染まるね

七つならせば 八つ山吹きはね

九つ小梅はちらちら落ちるね

十に殿さまの葵の御紋ね

丸山土手から東を見ればね

門の扉にオトワさんと書いたかね

オトワささせたるベツ甲の櫛はね

誰にもろたか

源次郎さんにもろたかね

もろた源次郎さんは

伊達者じゃないかいね

伊達者すぎれば 八月九月ね

九月半ば 蕪の葉で

もつちやもちや

○ びつきどの

びつきどの びつきどの いつ死んだ

ゆんべ酒飲んで 今朝死んだ

お医者きたから 戸開けろ

ガラリン ドン

ガラリン ドン ドン

×

×

びつきどの　びつきどの　いつ死んだ

ゆんべ餅食つて今朝死んだ

お医者来たから　戸開ける

ガラドンガラドン　今日はつし

お前に食せるもの　何にもない

油揚げ一枚　ジャンケンポン

盆　　唄

ハーアエーヤ

盆の十三日　四月から待つてだハーエ

待てた十三日コレサ

雨ふりだドッコイドッコイ

今年豊年だよ　穂に穂が咲いて

道の小草にもコレサ米がなる

道の小草に米なる時は

山の枯木にはコレサ小判なる

踊りおどるならば　品よくおどれ

品がよければヤコレサ嫁にとる

あまり長いど　お客さんがあきる

まずはここらでヤコレサ一休

白　ひ　き　唄

臼の廻るほど身は廻れども

なぜか姑の氣にいらぬ

ウンテテ挽いたら上りが早かる

姑ばさまは鬼でも蛇でも

かわいい殿御の親だもの

ウンテテ挽いたら上りが早かる

※おかまりー白のところに溜っていることをいう。

白はやえがみ※おかまり来ない

廻りかぜだよ おえん婆さ

米のなる木は岡山育ち

米のなる木をまだ知らぬ

米のなる木は知らねば教える

ひいた畳の裏見やれ

小国町 昔話

あ と が き 的 覚 え 書

武 田 正

小国町大石沢に高橋しのぶ、川崎みさを両嬢を訪れたのは昭和四十一年の夏のことであつた。それ以来今冬一月に大川悦生・小河内芳子両先生と共に訪れ、今夏に奥村幸雄先生と共に、そして再度大川先生のお伴をして四度昔話をお聞きする機会を得たことは大変うれしかった。十月に入つて、前から待ちのぞんでいた、小国町舟渡の塚原名右エ門氏と田村三郎氏にお会い出来た。このことからこの第三集が生まれることになった。この間、山形県教育委員会による水没地区民俗調査において、口頭伝承の分野を担当させて頂き、中津川地区と小国町の特に「旧津川村」との昔話の交流が納得できたように思う。

今集には特に高橋・川崎・塚原・田村の四氏のを収録することが出来、加えて、「小国・昔話集」によるものを三篇収録させていただいた。記して感謝するものである。収集に当って、二、三昔話が語られ、受け継がれてきたその伝承に

からむ話者の問題などについての考察をしておきたい。

×

×

川崎さんの場合は子どもの頃から子守りなどをして他家に奉公したが、記憶に残っている昔話は、父親（小国町玉川に生る）から聞いたものを中心に、市野々、叶水などで、男衆やおじいさんに聞いたものが多いし、また小学校の頃に、よく子どもたちが冬休みなどを利用して、友だちと「昔話の語りくら」をしたものだという。また富山の薬屋、ゴゼの語ったものも記憶して呉れている。

高橋しのぶさんの場合は祖母から聞いたものが多く、祖母の代は姉家督で、よく孫に昔話を語ったという。祖父は須貝家から来た方で、「石童丸」の話は祖父から伝えられたものと言うし、「かくれみの」「むかしむかし」は高橋さんの姉さんが伝承して来たものを高橋さんが再話して下さったものである。

塚原さんは叶水に生れ、市野々の出身である祖父高橋栄次氏が語ったもの「鴨とり」「カチカチ山」「蛙と猿の寄合餅」「曾呂利新左エ門」「一休和尚」などがあつたという。祖母の語り口はやわらかく、「土蜘蛛退治」などはその一つという。部

落には「若連中」契約があり、十五才から六十一才の男子が加入し、よくヤンコ（花札）や前句づけ、またホッピキ（クジ引きで当たった者が芸をする）などをやったものであったという。また寺に集まって「夜ばなし」といって、天下国家を論じたりすることもあったといい、十二・三才の頃に、大石沢出身の医者で、長崎に出て修行、更に江戸でも修行をつんだ高橋忠琢という人のところに行つて知っている昔話を語ってみたら七十話に及んで、大変褒められたことがあったという。忠琢という医者は米沢の藩医矢尾板氏の弟子であったという。主に塚原さんの語りは男語りとも言ふべきもので、祖父からはその他に「一の谷」「厳島」「義家」「大江山」などの昔話を聞いたものという。

中でも注目しておいてよいものは「ボデフリー——牛方と山姥——」の語りは祖母の語るものであったが、全篇が歌の調子で語られたということである。そして祖母もまた姉家督であったことである。また昔話の結句に次のようなものがあったという。

○むかしどーびん ○むかしとーびん河童の屁 ○むかしとーびん河童の屁、

とうすけカエツポ火ふいた　○むかしとーびん、さんすけキンタマかまのふ
た

というもの。またアイヅチに「ハイ」「ソレカラ」「ウン」などがあつた。

田村三郎氏は関川村（新潟県）の生まれで、「炭焼き長者」話は近所の高畠町出身のおじいさんから聞いたものであつたという。

『小国地方の昔ばなし』はキリスト学園の有志が作つたもので、九話収録されているが、始めてのものを三話のみ再録させていただいた。感謝申し上げる。その中で、結句に次のようなものも見られる。

○むかしどーびんさんすけキンタマ虫喰つて、ボコボコじんになった。さん
すけキンタマぶつつけた。
があつた。

鬼と豆のくいら

小国町昔話集 三

昭和45年10月25日 発行

編 武田 正

(南陽市三間通二二二の三 米東高教諭)

山形短期大学民話研究センター資料叢書

鬼と豆のくいくら

小国町昔話集 三

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十年六月三十日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
- 『むかしあつたけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
- 『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
- 『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
- 『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
- 『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
- 『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
- 『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
- 『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
- 『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
- 『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
- 『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
- 『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
- 『かつぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）

- 『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
- 『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌオさんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』（一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『続 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』（一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『続々 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』（一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『牛方と山姥（四） 海老名ちやう昔話 第四集』（一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『飯豊町昔話 — 大平・新沼・高畑 —』（一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊）
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』（一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊）
- 『お杉お玉 小国町昔話集（一）』（一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊）
- 『さとりのお化け 小国町昔話集（二）』（一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊）
- 『鬼と豆のくいぐら 小国町昔話集（三）』（一九七〇年十月、二〇〇八年六月再刊）

